



Title	『聖アントワーンの誘惑』におけるエジプトの神々
Author(s)	金崎, 春幸
Citation	Gallia. 2022, 61, p. 51-60
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/87598
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

『聖アントワヌの誘惑』におけるエジプトの神々

金崎 春幸

プルタルコス『モラリア』の中の「イシスとオシリスについて」において、女神イシスが、弟テュフォンによって殺害された夫オシリスの遺骸を捜し求める話を伝えている¹⁾。この神話は、フローベール『聖アントワヌの誘惑』のエジプトの神々の場面にも組み込まれているのだが、1848年から1849年にかけて執筆された第1稿および1856年の第2稿では、アントワヌの前にあらわれるのは聖牛アピスであり、1874年に出版された第3稿になってようやくイシスが登場し、最後に息子ハルポクラテスの死を嘆く。決定稿を読んだだけでは、アピスやイシス、また他の神々との連関が分かりにくい。本稿では読書ノート、プラン、下書きなどの読解によって変化の過程を追いつつ、エジプトの神々の場面において何が問われているのか、探っていきたい。

『聖アントワヌの誘惑』第1稿におけるイシスとオシリスとアピス

『聖アントワヌの誘惑』第1稿は1848年5月に書き始められているが、執筆開始前につくられた読書ノートの中に、「イシス、オシリス、アピス」と題された4頁にわたるノートがある²⁾。そのほとんどがクロイツェルの『古代の宗教』第1巻から取られており³⁾、4頁目の最後の4行のみがパウサニアスの『ギリシア案内記』からの抜粋である⁴⁾。また、それとは別に、神々などの生誕や死や復活についての引用をまとめたノートの中に、プルタルコスから引かれたオシリスの生誕に関する文章がある⁵⁾。

4頁のノートの冒頭で、「イシスとオシリスは生まれてこないうちに、母親の胎内で結ばれ、アルエリスを生む」と記される⁶⁾。つまり、オシリスとイシスは兄妹であると同時に、生まれながらにして夫婦である。両神は地上に降り、オシリスは王となるが、王位を狙う弟のテュフォンの計略にはまり、箱に閉じ込められ、

1) Plutarque, «De Isis et d'Osiris», in *Œuvres morales*, traduites du grec par Amyot, tome 5, Paris, Cussac, 1802, p. 237-251. フローベールの蔵書目録には、アミヨによってフランス語に訳されたプルタルコス作品集二十五巻がある (cf. *La bibliothèque de Flaubert*, Sous la direction de Yvan Leclerc, Publications de l'Université de Rouen, 2001, p. 84)。

2) Bibliothèque nationale de France, N.a.fr. 23671, f° 183, f° 183v°, f° 184, f° 184v°。

3) Frédéric Creuzer, *Religions de l'antiquité, considérées principalement dans leurs formes symboliques et mythologiques*, Ouvrage traduit de l'allemand, refondu en partie, complété et développé par Joseph-Daniel Guigniaut, Paris, Treuttel et Würtz, Tome I, 1825.

4) Pausanias, *Description de la Grèce*, Traduction nouvelle par Étienne Clavier, Paris, J.-M. Éberhart, 1814-1823, 7 vol.

5) N.a.fr. 23671, f° 149.

6) «Isis et Osiris n'étaient pas nés que s'unissant dans le sein de leur mère ils donnent le jour à Arueris» (N.a.fr. 23671, f° 183). 出典は Creuzer, *op. cit.*, I, p. 389.

海へ流される。「イシスの探索」が始まり、女神は「テュフォンの妹ネフテウスとオシリスの間に生まれた犬顔のアヌビスを連れていく⁷⁾」。オシリスの遺体の入った箱をフェニキアのビュプロスで見つけたイシスは、エジプトのプトに隠す。しかし、テュフォンがそれを捜し出し、オシリスの体を14の部分に切り刻んで、ばらまいてしまう。イシスは遺骸の断片を集めていくのだが、「14番目の断片は見つけることができず、エジプトイチジクでつくったファルスに代えて、遺骸をフィラエ島に埋める⁸⁾」。やがてオシリスは冥界から戻ってきて、息子のホルス（＝アルエリス）に教えを授ける。ホルスは最後にはテュフォンを打ち負かし、王となる。そして「オシリスの死後、イシスは彼の子ハルポクラテスを生んだが、この子は足を切断されて不自由で、苦しみの子であった」とノートに記される⁹⁾。

以上の神話は、プルタルコスの「イシスとオシリスについて」において語られたものが元となっているが、クロイツェルはさらに、ディオドロスの『歴史叢書』第1巻で伝えられた、この神話のヴァリエントを3つ挙げている。1つ目は、イシスがオシリスの遺骸の断片を別々の場所に埋めて、その各々に動物を捧げ、オシリスと同じ栄誉を与えるよう祭司に命じたこと。2つ目は、イシスがオシリスを木製の牝牛の中に埋めたこと。「3つ目は、オシリスの魂は雄牛のアピスに移り、この雄牛が死ぬたびごとに、魂は新しいアピスの体へと次々と移る」ようになったことである¹⁰⁾。

この後、ノートは『古代の宗教』の記述に沿って、イシスとオシリスの神話の物理的・天文学的解釈、エジプトの宇宙創成論、オシリスとギリシアの神との習合神であるセラピス、テュフォン（エジプト名セト）の神話、ヘルメス（エジプト名トート）の神話、動物崇拜へと続く。エジプトでもっとも崇められる動物の一つとして雄牛があり、とりわけアピスは「黒くて、額に白い三角形、右脇腹に半月に似た模様があり、舌の裏にスカラベのかたちの膨らみがついている」という特徴がある¹¹⁾。つまり、このような姿をした雄牛がオシリスの化身として選ばれるわけである。ノートでは、さらにアピス、ハイトカ、スカラベ、獅子、鰐、蛇といった神格化される動物について言及がある。

エジプトの諸神はこのように多様な相貌を示すのだが、これらの神々は至高の存在からの流出（*émanation*）によって生み出されることが説明されている。至高の存在は「最初にアムンとして自らをあらわす。これは全能神である。2番目に

7) «recherches d'Isis. elle prend avec elle Anubis à tête de chien fils d'Osiris et de Nephthys sœur de typhon» (N.a.fr. 23671, f° 183). 出典は Creuzer, *op. cit.*, I, p. 390-391.

8) «Isis ne retrouve pas le 14^e, et le remplace par le Phallus de sycamore – elle ensevelit le corps à Philes» (N.a.fr. 23671, f° 183). 出典は Creuzer, *op. cit.*, I, p. 392.

9) «Isis eut d'Osiris après sa mort Harpocrate, mutilé, boiteux, enfant de la douleur» (N.a.fr. 23671, f° 183). 出典は Creuzer, *op. cit.*, I, p. 394.

10) «3^e l'âme d'Osiris passait dans le bœuf Apis et toutes les fois que ce bœuf meurt, elle pass[e] successiv[ement] dans le corps de chaq[ue] nouvel Apis» (N.a.fr. 23671, f° 183). フローベールが省略している綴りは「 」で補っている。出典は Creuzer, *op. cit.*, I, p. 395.

11) «Apis noir, un triangle blanc sur le front, une marq[ue] pareil[le] à une demi lun[e] au côté droit, et un nœud de la form[e] d'un scarabée sous la langue» (N.a.fr. 23671, f° 184). 出典は Creuzer, *op. cit.*, I, p. 499.

造物神であるブタとして、3番目に恵みをもたらすオシリスとして自らをあらわす¹²⁾」。このように、全能神、造物神、地上に降りて恩恵をほどこす神という3つの段階を経て流出がおこなわれる。ただし、これはあくまで祭司の理解する神々の秩序であって、「民衆の信仰では、この至高の存在はオシリスという名をもつようになる¹³⁾」。つまり、民衆にとっては、天上の最高神も造物神も地上の最初の王もオシリスなのである。神々の生誕や死についての引用をまとめたノートの中で、「オシリスが生まれると、すべての人々の主が生まれたという声が天の高みから発した」という文が書き留められているが¹⁴⁾、これもエジプトの人々がオシリスを一種の救世主とみなしていることを示している。

プランの段階になると、アピスが前面に出てくる。

^{boitant}
 Apis tout seul – abandonné – les prêtres ont fui – il voit tomber en <ilis.>
 les dieux à tête d'ibis – il entend Isis qui cherche –
 [...]

je vois un hom avec un couteau – On fera des souliers avec ton
 cuir sacré¹⁵⁾

「たった一頭、見捨てられ、足を引きずって」あらわれるアピスは、^{イビス} 鵜の顔をした神々（＝トート）が倒れるのを見、「イシスが探しまわる声を聞く」。そして、「刃物をもった男が見える」と口にすると、死神が「お前の聖なる皮で靴をつくるのだ」と答える。読書ノートにあるようにアピスはオシリスの魂の化身なのだから、アピスは自分を捜すイシスの声を聞くわけである。1行目の上方に«boitant»と挿入されるのは、ヘロドトスの『歴史』第3巻で、ペルシア王の「カンビュセスは狂乱した人のように、短刃を抜き、アピスの腹に一突きしようとしたが、腿を刺しただけであった」というエピソードを踏まえている¹⁶⁾。ジャン・セズネック

12) «Le Grand être se révèle 1^o com[me] Amoun [...], c'est la toute puissance 2^o comme Phthas démiurge [...] 3^o comme Osiris, l'aut[eur] du bien» (N.a.fr. 23671, f^o 183 v^o). 出典は Creuzer, *op. cit.*, I, p. 408.

13) «dans la croy[ance] popul[aire], cet Êtr[e] suprêm[e] prend le nom d'Osiris» (N.a.fr. 23671, f^o 183 v^o). 出典は Creuzer, *op. cit.*, I, p. 408.

14) «À la naissance d'Osiris une voix cria du haut du ciel que le Seigneur de tout le monde venait de naître» (N.a.fr. 23671, f^o 149). 出典は Plutarque, *op. cit.*, p. 237-238.

15) N.a.fr. 23671, f^o 173. この草稿はジゼル・セジャンジェールによって転写されている：Flaubert, *Scénarios de La Tentation de saint Antoine. Le Temps de l'œuvre*, Présentation, transcription et notes par Gisèle Séginger, Presses Universitaires de Rouen et du Havre, 2014, p. 158. 同書の転写で2行目が«les deux tête d'ibis」となっているのは明らかな間違いである。

16) «Cambyse, tel qu'un furieux, tira son poignard pour lui en donner un coup dans le ventre ; mais il ne le frappa qu'à la cuisse» (Hérodote, *Histoire*, in *Choix des historiens grecs*, avec notices biographiques par J.-A.-C. Buchon, Paris, Auguste Desrez, 1837, p. 102). 1845年9月16日のアルフレド・ル・ボワトゥヴァン宛書簡からは、フローベールがヘロドトスの『歴史』をギリシア語で読んでいたことがうかがえるが、どの版で読んでいたのか、特定することはできない (Flaubert, *Correspondance*, Tome I, Gallimard, «Bibliothèque de la Pléiade», 1973, p. 252). 本稿では、第3稿のために参照したことが確実である『ギリシア歴史家選集』の中のヘロドトス『歴史』のフランス語訳から引用した。

によれば、13頁からなるヘロドトスの読書ノートが1931年に競売に出されたとのことであるが¹⁷⁾、現在はこの草稿の所在は不明である。フローベールはこのノートとクロイツェルやパウサニアスからのノートと合わせて、プランを作成したにちがいない。ヘロドトスからの逸話が挟まれることによって、エジプト人にとっては聖牛であるアピスも、カンピュセスの目から見ればただの牛であり、最後の文にあるように、牛革の靴になる運命となる¹⁸⁾。

もう一つのプランでもアピスが登場するのだが、アピスが聞くのは「エジプトの人々の苦悶の声」であり、「オシリスがやって来たとき、喜びと色彩」があったが、「今は心の傷」があるだけだと書かれている¹⁹⁾。ここでは、オシリスの死を嘆くのはイシスではなく、エジプトの民衆である。このプランでは、さらにアピスの世話をする祭司たちの様子や、サイスの町においてオシリスを尋ね求めて火を灯す祭りの情景などがヘロドトスからとられて、記される。

6頁からなる下書きでは、アピスはイシスの探索の声を聞いた後、神々に捧げられた祭りの情景などを思い出すが、最後には刃物をもった男たちの姿を見するという設定となる。イシスは、オシリスの遺骸を搜索するとき、「泣きながら、自分の痩せ細った心臓にエジプトイチジクのファルスを押しあてると、そこからはもはや死者の愛の熟さぬ果実である虚弱なハルボクラテスしか孕まない」と書かれる²⁰⁾。読書ノートではハルボクラテスは冥界から戻ったオシリスから生まれたのだが、ここでは父親は木製のファルスになっている。「イシスのまわりで犬顔のアヌビスが吠えている」が、アヌビスは「喉の渇きで舌を出し、女神は倒れて、ヴェールを顔の上に下ろす²¹⁾」。オシリスが冥界から戻ることやホルスが復讐を遂げることは語られず、イシスによるオシリスの搜索にまつわる話だけに絞られて、アピスの語りの中に嵌め込まれている。この後、アピスは「カンピュセスが刺した傷がますます痛む」と嘆く一方で²²⁾、自分が神として崇められた時期のさまざまな祭りや祭司たちの様子を思い浮かべる。そして、「私はオシリスであり、神であり、姿をあらわした造物神であり、化身した魂であり、偉大なるすべてであった」と叫ぶ²³⁾。アピスはオシリスの化身であり、民衆の信仰ではオシリスは至高の存在でもあり、造物神でもあるのだから、こうした発言になるわけである。このような神アピスも、最後には刃物をもった男たちの登場に怯えることになる。

17) Jean Seznec, *Les sources de l'épisode des Dieux dans «La Tentation de saint Antoine»* (Première version, 1849), Paris, Vrin, 1940, p. 71.

18) ヘロドトスによれば、腿を刺されたアピスはほどなく死ぬが、祭司たちによって葬られた(Hérodote, *op. cit.*, p. 102)。靴になるというのはフローベールの創作である。

19) «J'entends – agonie du monde égyptien Quand Osiris arrivait – joie & couleur Mais maintenant – blessure» (N.a.fr. 23671, f° 174 v°).

20) «sur son cœur amaigri elle presse en pleurant le phallus de sycomore qui ne la fécondera <plus> que du débile Harpocrate fruit avorté de leurs funèbres amours» (N.a.fr. 23669, f° 286 v°). <> は行間の挿入である。

21) «Autour d'elle jappe Anubis à tête de chien [...] – il tire la langue tout altéré <de soi> et la déesse [...] s'affaissant par terre rabat son voile sur sa tête» (id.).

22) «je souffre <de plus> à la blessure que m'a faite Cambyse» (N.a.fr. 23669, f° 277 v°).

23) «J'étais Osiris [...] j'étais Dieu – j'étais <j'étais> le démiurge apparu, Kneph in l'âme incarnée, le grand tout» (N.a.fr. 23669, f° 11).

清書は下書きと大きく変化する箇所はないのだが、その中の N.a.fr. 23664, ff^{os} 457-458 という番号のついた草稿を見ると、アピスがイシスの声を聞くところからイシスがヴェールを下ろすところまでに [] という削除マークがついている。そして、左余白に、「パピルスの履物を履いた私の祭司たちはいったいどこにいるのか。祭司たちは聖なる言葉をゆったりとした節にのせて歌いながら私の毛を梳いてくれた」と書き込まれている²⁴⁾。この書き込みは、1856 年の第 2 稿の清書原稿²⁵⁾と内容、筆跡とも非常に近いことから、1856 年に第 2 稿を作成するための第 1 段階として、第 1 稿の清書に手を入れたときのものであることは疑いがない。実際、第 2 稿ではイシスに関わるすべての挿話が削除され、アピスの世話をした祭司たちの話に差し替えられるのである。

第 1 稿で、イシスは背景に追いやられて、アピスが前面に出てくるのは、インドの神々の化身を受けたかたちで、エジプトの場面が展開するからだと思われる。ヴィシュヌが魚や亀や猪へと化身していくのと同様に、オシリスは牛に生まれ変わって登場する。しかし、アピスはカンピュセスの瀆神行為によってただの牛とみなされ、最後に自分の皮が剥がされる恐怖を味わうことになる。第 2 稿では、アピスの嘆きの中にイシスの嘆きが組み込まれるという二重構造を解消するために、イシスの挿話は削除される。

『聖アントワヌの誘惑』第 3 稿におけるイシスとハルボクラテス

1862 年あるいは 1863 年に書かれたと思われる草稿の中に、イシスがインドの女神マーヤーや聖母マリアとともにあらわれるプランがある。

Les trois Vierges Mères – Maià – Isis – Marie
la dernière ne dit rien. elle montre un petit enfant
crucifié. parallélisme avec les pieds d'harpocrate.
(entre l'Inde & les Dieux du Nord)²⁶⁾

フローベールが参照した文献の中にマーヤーとイシスとマリアの類縁性について論じた箇所は見当たらない。しかし、『古代の宗教』第 4 巻に、マーヤーが息子のカーマ（サンスクリット語で「愛」）を膝にかかえた図版や、イシスがホルスあるいはハルボクラテスを膝の上にのせた図版があり²⁷⁾、それらは聖母子像を想起させ

24) «Où sont <donc> mes prêtres chaussés de byblos [...] ils ~~chantaient~~ <brossaient mon> poil en chantant sur un air lent des paroles sacrées» (N.a.fr. 23664, f° 457).

25) N.a.fr. 23665, f° 153.

26) N.a.fr. 23671, f° 167. このプランをセズネック (*op. cit.*, p. 72) は第 1 稿のためのものとして紹介しているが、f° 167 には 1854 年に刊行されたジャン・レノーの『地と天』(*Terre et Ciel*) への言及が書かれているので、第 1 稿のプランではありえない。f° 166 から f° 170 までの 5 枚のフォリオは紙質や筆跡から見て、同一時期に書かれたもので間違いはないが、内容は第 2 稿を踏まえた上で第 3 稿までには至らない、いわば 2.5 稿の相を呈している。この 2.5 稿のプランが書かれた時期としては、『サラムボー』の執筆を終えた 1862 年後半、あるいは夢幻劇『心の城』を書き始める前の 1863 年前半しかない。

27) マーヤーの図版は Creuzer, *op. cit.*, IV, planche XIX, fig. 104. イシスの図版は *ibid.*, planche

る。さらに、フローベールはプランに、イシスの息子ホルポクラテスと「十字架にかけられた幼子」つまりイエスとの近似性を書き込んでいる。そもそも幼子イエスが磔刑に処されるのは奇妙だが、イメージとして足の不自由なホルポクラスと重ねあわせたのであろう。そして、最後の括弧内にあるように、この場面を「インドと北欧の神々の間」



マーヤー



イシス

に置こうとする。つまり、インドの神々の最後にマーヤーが登場し、そこに第2稿では完全に削除されたイシスと、傷ついたイエスを伴ったマリアが加わるというプランだったのである。

『感情教育』を書き終えたフローベールは『聖アントワヌの誘惑』第3稿の準備にとりかかり、1870年の春には13頁からなる作品全体のプラン (grand plan) を作成する。その第5部にあたる神々の列にアピスとイシスが見られる。

Diane d'Ephèse – Cybèle

[...] – [...] Apis, mugissant, & boitant

[...]

Diane d'Ephèse. [Minerve] Isis, le voile sur la face, pareille à la S^{te} Vierge avec son Orus. elle est en émoi, court de côté & d'autre folle, – son petit Orus est mort. Antoine commence à être troublé. Adonis²⁸⁾

「アピス、うなり声をあげて足をひきずる」とある一方、「イシス、顔にヴェールをかけ、息子のホルスを抱えた姿は聖母に似ているが、心乱れて、狂おしく方々を駆けまわる。子供のホルスは死ぬ。アントワヌは動揺し始める」と書かれている。ここでは、前後の神々の配列は異なるものの、アピスは第2稿と同じ設定が保持され、イシスも1862年あるいは1863年のプランと同様に聖母マリアとの類似性が示されている。このグラン・プランで«Orus»や«petit Orus»というの

XXX, fig. 138.

28) N.a.fr. 23671, f° 95. この草稿は、プレイアード版フローベール全集第5巻においても転写されている：Flaubert, *Œuvres complètes* (désormais OC), Tome V, Édition établie par Stéphanie Dord-Crouslé, Anne Herschberg Pierrot, Jacques Neefs et Pierre-Louis Rey, Gallimard, «Bibliothèque de la Pléiade», 2021, p. 169-170.

はハルポクラテスのことだから²⁹⁾、1862年あるいは1863年のプランと同じ子供を抱えてイシスは登場していることになる。

その後作成されたプランでは、次のように神々の配列が変わる。

Cybèle, à la fin pleure Attys. – [...]

Adonis – Antoine est dégoûté des Religions bestiales. [...]

[Apis, mugissant & boitant]

Osiris le petit

Isis. le voile sur la face, en émoi. cherchant Osir ⁽³⁰⁾ Horus est mort

まず、フリュギアの女神キュベレーが登場し、愛するアティスの死を嘆く。次にフェニキアの神アドニスがあらわれるのだが、その行に「アントワヌは動物的な宗教にうんざりする」と書かれ、次の「アピス、うなり声をあげて足をひきずる」に削除のマークが入る。最後に、オシリスを捜し求めるイシスが「子供のホルス」つまりハルポクラテスとともにあらわれる。ここでは、それまでのプランにあったイシスとマリアとの類似性への言及は消えている。アピスの登場が削除された結果、エジプトの神々の場面は「動物的な宗教」の系列から離れて、イシスが中心となり、キュベレー、アドニス、イシスという新たな系列に入ることになる。ただ、この新たな三神をつなぐ要素は何か、プランを見ただけでは分かりにくい。

このプランとはほぼ同じ時期に書かれたと思われる5頁にわたる読書ノートには³¹⁾、アルフレド・モーリーの『古代ギリシア宗教史』からの引用がある³²⁾。同書の第3巻で、モーリーは比較神話学の観点から、フリュギアやフェニキアやエジプトの女神には明確な類縁性があることを指摘し、「キュベレーがアティスの喪失を嘆き、アスタルテがアドニスの喪失を嘆いたように、イシスは夫のオシリスの喪失を嘆いた」と述べている³³⁾。この記述は読書ノートには書き留められていないものの、フローベールが第3稿の神々の配列を考える上で、少なからず影響を与えたにちがいない。上記プランではフェニキアの女神アスタルテの名は見当たらないが、アドニスの場面のより詳しいプランでは、第1稿にも第2稿にもなかったアスタルテが登場する³⁴⁾。ここで初めて、キュベレー、アスタルテ、イシスとい

29) Cf. «*Harpostrate est Horus enfant*» (Creuzer, *op. cit.*, I, p. 808, note 4). ハルポクラテスという名は、「ホルス＝子供」という意味のエジプト語をギリシア語に直したものである。なお、ブルタルコス (*op. cit.*, p. 238 etc.) はホルスを «Orus» と綴っているのも、フローベールもそれに従っている。

30) N.a.fr. 23670, f° 3.

31) N.a.fr. 23668, f° 204 v°, f° 206 v° ; N.a.fr. 23671, f° 44, f° 44 v°, f° 45.

32) Alfred Maury, *Histoire des religions de la Grèce antique*, Paris, Ladrangé, 1857-1859, 3 vol. 読書ノートには、この『古代ギリシア宗教史』や第1稿のために参照した資料以外に、シャンポリオン＝フィジャック『古代エジプト』とメナール訳『ヘルメス・トリスメギストス』からの引用が見られる : Jacques-Joseph Champollion-Figeac, *Égypte ancienne*, Paris, Firmin Didot, 1863 ; *Hermès Trismégiste*, Traduction complète par Louis Ménard, Paris, Didier, 1866.

33) «Isis pleurait son époux Osiris, comme Cybèle pleurait Atys, comme Astarté pleurait Adonis.» (Maury, *op. cit.*, III, p. 284)

34) «une femme plus désolée que les autres, agenouillée, = (Astarté.)» (N.a.fr. 23668, f° 207 v°).

う、自分の愛する者を失って悲嘆にくれる女神の系列ができあがったわけである。

1871年9月、フローベールはイシスの場面の執筆を始める。下書きは22頁あるが、その第1段階の草稿はアドニスの棺台が消える場面で始まり、その下に、「ナイル河の向こう岸、砂漠の真ん中に一人の女性があらわれる」と書かれる³⁵⁾。顔も体もヴェールに包まれた女性は「左腕に幼子」をかかえ、「傍らには大きな狒々がうずくまっている。彼女は天を仰ぐ。距離があるにもかかわらず、アントワーンにはその息遣いが聞こえる³⁶⁾」。聞こえるほどの息遣いは、彼女が駆けまわってきたことを示す。まず、イシスは自分が方々を捜してきたと語り、一緒に捜索してくれた猿(＝アヌビス)に礼を言う。星々や神々に、夫とまた会うことができるのか、問いかける。そして、「洪水がやってきたときのエジプト全土の喜び」など、オシリスが生きていた頃を回想する³⁷⁾。「エジプトは天の写しであったのに、テュフォンが夫を引き裂いてしまった」と³⁸⁾、テュフォンによるオシリスの殺害に言及する。続いて、オシリスは「亡霊のまま、私が眠っている間にハルボクラテスを孕ませました」と女神は語る³⁹⁾。第1稿ではハルボクラテスは木製のファルスから生まれたことになっていたが、ここでは、プルタルコスやクロイツェルの記述通り、亡霊のオシリスが父親になっている。最後に、イシスは「でも終わりです。あの方はもうおしまいです。戻ることはありません」と言い、「気がつく、子供は死んでいる⁴⁰⁾」。この草稿の下方では、ハルボクラテスの死を見てイシスが絶望の叫び声をあげるさまが描かれるが、その行間に、「彼女が自分のヴェールについて話すとき」、アントワーンはヴェールを「持ち上げるしぐさをする」という文が挿入される⁴¹⁾。イシスは向こう岸にいたはずだが、いつの間にか、ヴェールに手が触れるほどの距離にいる。アントワーンはヴェールを上げて、女性の正体を見たかったのであろう。彼の好奇心を示すこの文は、第3段階の下書きまでは残るものの、それ以降は消えてしまう。

10段階の下書きを経て、イシスの場面は清書に至る。決定稿ではどうなるか、プレイアード版で確認していこう。イシスがナイル河の向こう岸の砂漠の中に、ハルボクラテスとアヌビスを伴ってあらわれ、最後にハルボクラテスが死ぬという全体の設定は、下書きの第1段階と基本的に変わらない。変化するのは、イシ

アドニスの場面におけるアスタルテについては、拙著『フローベール研究—作品の生成と構造—』大阪大学出版会、2014年、249-258頁参照。

35) «de l'autre côté du Nil, la même <une> Femme se tient, au milieu du désert» (N.a.fr. 23668, f° 206).

36) «Un petit enfant sur son bras gauche. Un gd cynocéphale accroupi, près d'elle. Elle regarde <leva la tête sur> le ciel. – & Malgré la distance Antoine entend sa voix <respiration>» (id.). «gd»はgrandの略記である。

37) «Quand . . l'inondation arrivait joie de l'Égypte» (id.). プルタルコス (*op. cit.*, p. 275) によれば、エジプト人は「ナイル河をオシリスの流れだとみなし、そう呼んでいる」ので、ナイル河が洪水を起こすことはオシリスがエジプトに恩恵をもたらすことと同一視された。

38) «L'Égypte reproduisait le ciel <Mais typhon l'a déchiré !>» (N.a.fr. 23668, f° 206).

39) «Il m'a fait, étant ombre, Harpocrate <dans mon sommeil>» (id.).

40) «Mais <cependant> c'est fini. il est définitivement fini. – il ne reviendra pas [...] Elle s'aperçoit que son enfant est mort» (id.).

41) «<quand elle parle de son voile,> Antoine fait <fait un geste p°> soulever» (id.). «p°」はpourの略記である。

スの言葉とアントワヌの反応である。まず、イシスは「おお万物の始まりであるネイトよ！永遠なる主アモン、造物の神プタ、その知恵たるトート、冥界の神々、各々の州の三神よ」と呼びかける⁴²⁾。さらにハイタカや錫といった神格化された動物や、星座や風など、自分を取り巻くあらゆるものに呼びかけて、オシリスがどこにいるのか教えてくれと懇願する。一緒に捜しまわってくれたアヌビスに礼を言った後、オシリスの遺骸の断片を捜したが、自分を孕ませたものだけが見つからないと嘆く。それに対して、アントワヌは「恥知らず！立ち去れ、立ち去れ！」と罵る⁴³⁾。イシスはオシリスとともにいた頃を思い起こし、「私たちは双子の君主、永遠の胎内にいたときからの夫婦として、より崇高な世界にふたりで君臨していました」と言う⁴⁴⁾。しかし、「永遠の胎内にいたとき」に夫婦が交わって生まれたホルスについては触れられない。一方、ハルボクラテスの方は、冥界から戻った亡霊によってハルボクラテスが生まれたと明言する。そして、イシスは腕に抱いた子供を見て、「あの方だ！あの方の目だ。雄羊の角のかたちに編んだ髪は、あの方の髪だ！お前はあの方の御業を継ぐのです」と言う⁴⁵⁾。ハルボクラテスがオシリスに似ているとか、オシリスの後継者になるといった一節はフローベールが参照した文献にはないのだが、下書きの第7段階からイシスの言葉に嵌め込まれていく。過去の栄光のエジプトはもはや存在しないことを確認したイシスは、アヌビスも消え、ハルボクラテスも死んでしまったことに気づく。「きわめて鋭く陰鬱で痛ましい叫び声を空中に響かせたので、アントワヌはそれに呼応して別の叫び声をあげ、腕を広げて、イシスを支えようとする」が、女神の姿はもはやなく、アントワヌは「恥ずかしさに打ちのめされて、顔を伏せる⁴⁶⁾」。

イシスの場面を理解するためには、直前のアドニスの場面を考慮に入れなければならない。棺台に横たわるアドニスの前に女神アスタルテが登場する場面の下

42) «Ô Neith, commencement des choses ! Ammon, seigneur de l'éternité, Ptah, démiurge, Thoth son intelligence, dieux de l'Amenthi, triades particulières des Nomes» (OC, V, p. 110-111). プレイアード版の注 (*ibid.*, p. 1383, note 40) では、これらの神々の説明として、マテル『グノーシス主義の批判的歴史』やクロイツェル『古代の宗教』が挙がっているが、実際にはシャンポリオン＝フィジャックの『古代エジプト』から引かれた読書ノートから来ている。N.a.fr. 23668, f° 206 v° では、ネイトは «Neith = (Bouto) commencement[en]t de tout», アモンは «Au sommet Ammon», プタは «Ptha = démiurge actif», トートは «Prêtres = <étudiaient> 42 livres de Thoth», 冥界の神々は «quatre génies de l'Amenthi. Amset, Hapi, Soumaoutf, Kebhsniv», 各州の三神は «série de triades. chaque nome avait la sienne, spécialement» と記されている。出典は各々、Champollion-Figeac, *op. cit.*, p. 254, p. 245, p. 255, p. 135, p. 261, p. 246 である。なお、第1稿のための読書ノートでは造物神プタは «Phthas» という綴りであったが(注12参照)、シャンポリオン＝フィジャックでは «Phtha», 第3稿の草稿では «Ptha» となっていて、1874年の初版も «Ptha» である。プレイアード版ではなぜ «Ptah» なのか、不思議である。

43) «Impudique ! va-t'en, va-t'en !» (OC, V, p. 111)

44) «Nous trônions tous les deux dans un monde plus sublime, monarques-jumeaux, époux dès le sein de l'éternité» (*id.*).

45) «C'est lui ! Ce sont ses yeux ; ce sont ses cheveux, tressés en cornes de bélier ! Tu recommenceras ses œuvres.» (OC, V, p. 112)

46) «Alors elle pousse dans l'air un cri tellement aigu, funèbre et déchirant, qu'Antoine y répond par un autre cri, en ouvrant ses bras pour la soutenir. [...] Il baisse la figure, écrasé de honte» (OC, V, p. 113).

書きで、「アントワヌはイエスの母を思い浮かべる」と書き込まれ⁴⁷⁾、それが清書にまで残る。このように、アスタルテとマリアとの相似性、アドニスとイエスとの相似性はテキスト上にはっきりと示されている。それに対して、イシスの場面になるとマリアやイエスとの類似性は影を潜める。それどころか、夫のファルスが見つからなかったというイシスの言葉に、アントワヌは恥知らずと罵るし、ハルボクラテスも聖霊ではなく、亡霊が生み出した子であることが分かって、イエスとの違いが強調される。その一方で、下書きの初期段階でアントワヌがイシスのヴェールを持ち上げるしぐさがあり、彼の並々ならぬ好奇心が読み取れるし、最終段階で付け加わった、イシスの絶望の叫びと同時に叫びをあげ、体を支えるようなかたちになって恥じ入る最後の場面も、女神に対する思い入れをあらわすものと考えられる。要するに、1862年あるいは1863年のプランで提示されたイシスとマリアとの相似性、ハルボクラテスとイエスとの相似性は、テキストの段階になるとイシスがアスタルテに、ハルボクラテスがアドニスに入れ替わったかたちでフェニキアの神々の場面で再現され、その余波を受けてエジプトの場面では、偽のマリア、偽のイエスと知りつつも、アントワヌは子を失った母親を前にして心乱すことになる。

第3稿でイシスが天を仰いで呼びかけるネイトやアモンは永遠の神、不死の神であるが、オシリスやイシスはそうではない。オシリスはテュフォンに殺され、冥界の神として復活する。その意味では、エジプト神話で、イエス・キリストにもっとも近いのはオシリスであろう。第1稿および第2稿に登場するアピスはオシリスの生まれ変わりであるが、雄牛の姿であられ、皮を剥がされそうになる悲喜劇を演じる。第3稿では、イシスはオシリスの亡霊から生まれたハルボクラテスを抱いて登場し、ハルボクラテスがオシリスに生き写しであり、オシリスの後を継ぐものだと言うが、ハルボクラテスは死んでしまう。ブルタルコスの伝える神話ではオシリスの後継者はホルスだが、ホルスについてはイシスは何も語らない。『聖アントワヌの誘惑』のエジプトの神々の場面で描かれているのはオシリスを受け継ぐ者の死であり、それはイエス・キリストを受け継ぐ者の死に通じるものであろう。

(大阪大学名誉教授)

47) «Antoine pense <songe> à la mère du Christ <de Jésus>» (N.a.fr. 23668 f° 203). 前掲拙著 256 頁参照。